

横浜市小学校社会科研究会

4 学年部会

研修会記録

第4号

令和4年2月9日

横浜市小学校教育研究会

会長 後藤 俊哉

横浜市小学校社会科研究会

会長 梅田 比奈子

同4学年部長 岡村 伸一郎

【提案日時】

11月10日(水)

提案 伊藤 夏芽 先生(永野小)

【会場】

横浜市立平沼小学校

司会 小杉 啓司 先生(東戸塚小)

記録 小山 美苗 先生(山内小)

<提案者より>

視点1

子どもたちが日常生活から感じる疑問から単元作りを行った。

途中でそれまでの学習と日常生活とを照らし合わせた振り返りを行うことで、学習への意欲を高め、扱うべき内容の見落としなどを見つけることができた。→学習問題の調整を意識

視点2

学習を通して子どもの見方・考え方を広げ、本気の学習問題へと繋いだ。

分散登校で人との出会いが難しい中、市の広報動画やNHK for schoolを活用した。

学習時間以外でも自力で調べ学習を進める子どもや、他の国のしくみに目を向ける子どももあり、主体的に学習を進めていた。

教材について

自分たちの飲む水は多くの人々が協力してこそ安心して飲める水になることを捉え、水の供給のために働く人々の思いに触れることができた。新しい事実との照らし合わせから主体的な学習へのきっかけをつかむことができた。

指導評価計画

導入時には、水道水の使用量を調べた。港南区の馬入川の水の実物を見せ、子どもはこの水がこれからどのようにきれいになるのだろうかという疑問をもったことで「たくさんの水道水をどこからどのように家に送っているのだろうか。どこでどのように水道水を作っているのだろうか。」と単元を見通す学習問題につながった。その後、浄水場のしくみなどをNHK for school、市の広報動画等から調べる活動となった。

途中、単元を見通す学習問題の振り返りを行う中で水道管については未習であることに気付いた。また水漏れについて目を向ける子が多く、本気の学習問題へとつなげていった。

本気の学習問題(本時)

本気の学習問題を「地震がきたときに自分の家に水道水はくるのだろうか」とした。

学習前に水道管破裂のニュース動画を見せると、水が漏れて人々が困っていたという発言が聞かれた。さらに港南区の水道管耐震工事の写真を見せると、自分の家の近くでは耐震工事を行っていないがこのままで安心?と自分にできること(自助)を考えるようになった。

考察

視点1について。事実と知っていたこととのギャップに出会わせるため実物を見せるなど工夫した。日常から気づいたことを話し合い、自然な流れで単元を見通す学習問題が成立した。一方、資料提示のタイミングの難しさ、話し合いの目的が明確でなかったことが課題。

視点2について。子どもたちの疑問から「水漏れ」という事象に触れる子が多かった。子どもたちの「どうなっている？」をもとに、様々な視点から意見交流ができた。一方、話し合いに前向きになれない子も目立った。教師がつぶやきを拾いながら進めたが、教師側の言葉が多かった。発問や資料提示のタイミングの工夫を図ることで、さらに学習を広げられたのではないかと。

<協議内容>

視点1

Q 今までに行った授業と比べて子どもたちがどう変わったか

A 実物を見せることで子どもたちのつぶやきが増えた。学習が一方的ではなくキャッチボールとなった。

Q 子どもたちの振り返りが学習に活かされた場面はどこか。

A 「これまでの流れをまとめたい。」と子どもたちが絵を描いてまとめてくれた。浄水場につながる場面であり、これまで取り上げられてない内容に気づけた。

視点2

Q 「地震が来た時に水道管から水が来ない。」→学習問題からの事実の見せ方としてはどうなのか。水道局の取り組みを子どもが後ろ向きにとらえてしまうのでは？

A 配水管が耐震になっていない事実→工事中→安心ではない。そこから自助に目を向けることにつながった。

- ・現実を知って対策を考えることが自助に向かう。水道局の対策に安心、そうでないなど様々な捉えからどうするかを考えるのが社会科。
- ・事実は大切。自分の家に水道水が来ることもあると捉える。水道局の対策から安定的な供給に努力していることをとらえたい。
- ・取り組みはあっても自分たちもできることがあるととらえることが大切。
- ・防災の学習ではない。教師の意図として水道局の安定的供給への取り組みをとらえさせたい。給水や備蓄庫の水など、水道局の取り組みの事実をそろえると誤解がないのでは。
- ・事実の切り取り方、タイミングが大切。
- ・安心や不安という受け止めは見つけた事実から捉えたい。
- ・視点2なので、これまで学習したことからの発言が出るようにしたい。なぜ水を備えなければならないのか自助の必要を実感させたい。結論前になぜ必要なのかを考えることが大切。
- ・これからは、事実を見せて子どもたちに考えさせることが求められている。

Q 第7時で初めて水道管が出てくるが、どのようなことから？

A ノートに水の流れについてかかせてみると配水管という子があり、では施設について学習していこうかという流れだった。

・事実と自助の話が出てくるが、45分の中で自助までたどりつけるのか。取り組みの事実をしっかりと見せると自分ができることについて考える時間をもっととれるのでは。

Q 家庭の水調べから馬入川の水への文脈は？

A もともとそういう水ではなく、事実はこれだというように示した。

・知らなかった事実との出会いが水の単元の中にはたくさんある。単元づくりではその出会いを丁寧に考えていくことが大事。

・杉内実践でもあったように、事実との出会いから学習の方向性を考えていきたい。

・水の使いすぎに気付き、最後は水道局の取り組みの素晴らしさに気づく。

・事実を丁寧に見ていくことは大事。導入で身近なところから入っていくと調べたいという思いを持つようになり、目に見える実物を見せたい。自主的に調べた子どもたちの姿の報告もあり、主体的に学ぶ子どもの姿に結び付いていたのでは。

・単元の導入で驚きがあると学びの活力になる。座席表で子どもたちは水道局の努力に気づいているので、他の子どもにも広げていきたい。

<講師の先生より>

下野庭小 黒木 英晴 校長先生

NHK for schoolを資料（事実）としていたのは分散登校の中でやりにくさもあったか。

馬入川の水の実物提示は先生の本気が伝わる。一方、透明度があるから安心という視点は疑問。見た目だけでない安心、安全という視点にも踏み込みたい。

宮ヶ瀬ダムからはみなとみらいが見え、あそこまで水がいつているのかという実感をもつことができる。NHKでは一般的なとらえになりがち。ダム建設に住民の犠牲を経ていることなども感じさせたい。水道局をはじめ、みんなが協力して私たちの水が運ばれていることを捉えさせたい。

本気の学習問題は子どもに不安を感じさせることから作るのではなく、様々な事実の積み重ねからさらに追究したいことを見つけるように、再検討したい。

座席表からは、耐震の取り組みへの着目や自助の必要性への気づきが見られる。水道局の努力にも気づかせたい。多様な視点、違った視点を持つ子のとらえをどのように授業に生かしていくか。

単元目標や評価基準にも、耐震の取り組みへの視点を入れていく必要がある。

文責 遠藤 泰樹 (矢部小学校)